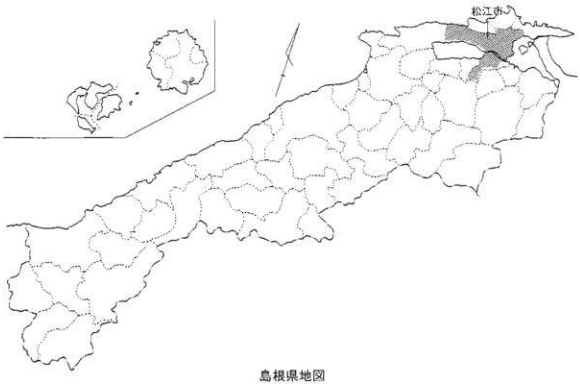
(財)松江市教育文化振興事業団
文化財調査報告書第7集

文化財愛護
シンボルマーク

向遺跡発掘調査報告書

1994年3月

松江市教育委員会
(財)松江市教育文化振興事業団



島根県地図

松江市地図

例　　言

1．本書は、平成５年度において今岡工業株式会社からの受託事業として（財）松江市教育文化振興事業団が実施した向遺跡発掘調査にかかる報告書である。

2．発掘調査期間　着　手　平成５年５月10日
　　完　了　平成５年８月31日

3．調査の組織は下記の通りである。

委託者　今岡工業株式会社　　代表取締役　今岡余一良
受託者　松江市代表者　　松江市長　石倉孝昭（平成５年11月まで）
　　宮岡寿雄（平成５年12月から）
主体者　松江市教育委員会　　教育長　諏訪秀富
　　生涯学習部長　中西宏次
　　文化課長　村松　榮
　　文化財係長　岡崎雄二郎
実施者　（財）松江市教育文化振興事業団（平成５年７月から）
　　理事長　古岡俊雄
　　事務局長　日高稔夫
　　埋蔵文化財課調査係長　中尾秀信
調査者　（財）松江市教育文化振興事業団　埋蔵文化財課
　　調査係　発掘調査員　宮本英樹
　　同　調査補助員　稲田　奨
　　同　遺物整理員　瀬田明子

4．出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。

5．遺構の実測、写真撮影は宮本、稲田がこれを行った。

6．挿図中の方位は調査時の磁北によった。高さは海抜標高を表す。

7．遺物の実測、写真撮影は稲田がこれを行い、浄書は瀬田、拓本は荻野哲二（松江市教育委員会）がこれを行った。

8．本書の執筆・編集は主として稲田がこれを行い、宮本がこれを助けた。

目　　次

Ⅰ．調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ．位置と歴史的環境 …… 1

Ⅲ．調査の概要 …… 4
　調査の方法と経過 …… 4
　1．掘立柱建物 …… 9
　2．溝状遺構 …… 16
　3．土　　壙 …… 19
　4．不明遺構 …… 25
　5．井戸状遺構 …… 29
　6．遺　　物 …… 30

Ⅳ．ま　と　め …… 34

文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し，決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは，左右にひろげた両手の掌が，日本建築の重要な要素である斗栱（ますぐみ），すなわち斗（ます）と栱（ぐみ）の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし，これを三つ重ねることにより，文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。

文化財愛護シンボルマーク

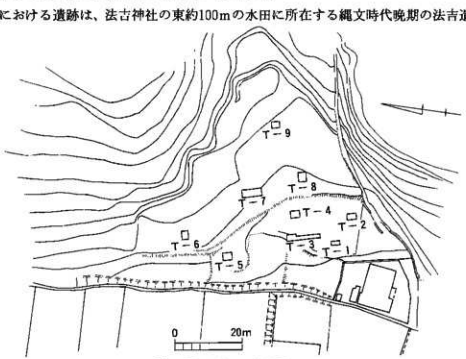
Ⅰ．調査に至る経緯

平成４年10月に今岡工業株式会社が住宅団地造成を計画し遺跡の分布調査について依頼を受けた。平成４年11月11日に試掘調査を実施した結果、区域内に設定した９箇所のトレンチからは遺構と考えられるものは検出できなかったが、工事予定区域南側にあたる２箇所のトレンチから奈良時代～平安時代の須恵器の細片が出土した。地形から見て、谷部及びその周辺に遺構が存在した可能性が高いと予測された。その旨事業者に説明し、今後の取扱について協議した結果、計画区域北側は造成に着手し、南側の約1,000㎡を「向遺跡」と命名し、全面発掘調査することとなった。

Ⅱ．位置と歴史的環境

向遺跡は、松江市国屋町339番地に所在する。ＪＲ松江駅から北西に直線距離で約2.5kmの月照寺と法眼寺の立地する低丘陵の西側谷筋の低湿地に位置する。

周辺地域における遺跡は、法吉神社の東約100ｍの水田に所在する縄文時代晩期の法吉遺跡（６）が



第１図　試堀調査位置図

第２図　Ｔ－８・９出土遺物実測図、縮尺$\frac{1}{3}$

初見で、弥生式前・中期の土器、黒曜石、石鏃、土錘のほか、土師器片も出土している。これに続く弥生時代の遺跡としては、法吉遺跡の南西方約１km離れた低丘陵の裾に所在する春日[註1]遺跡（４）、北方約200ｍの水田に所在する下[註2]り松遺跡（８）、北方約350ｍ離れた谷筋の下の水田に所在する田中谷遺跡（11）が知られている。古墳時代になると、白鹿山の山並みに沿って麓に古墳が築造される。造り出し部で葬送の祭祀を行った伝[註3]宇牟加比売命御陵古墳（７）、方墳など２１基から成る月廻古墳群（10）、横穴式石室を有する岡[註4]田薬師古墳（14）全長24ｍの前方後円墳の田中谷古墳（９）などがある。横穴墓については、本遺跡の北東方約100ｍに、とね[註5]り坂横穴群（３）、春日遺跡の東方約180ｍの法吉小学校裏山横穴群（５）などがある。戦国時代になると、宍道湖岸の低丘陵上に荒[註6]隈城跡（２）、白鹿山山腹に白髪城跡（12）、真山城跡がある。

註１．勝部　昭　「御崎山古墳」1975年

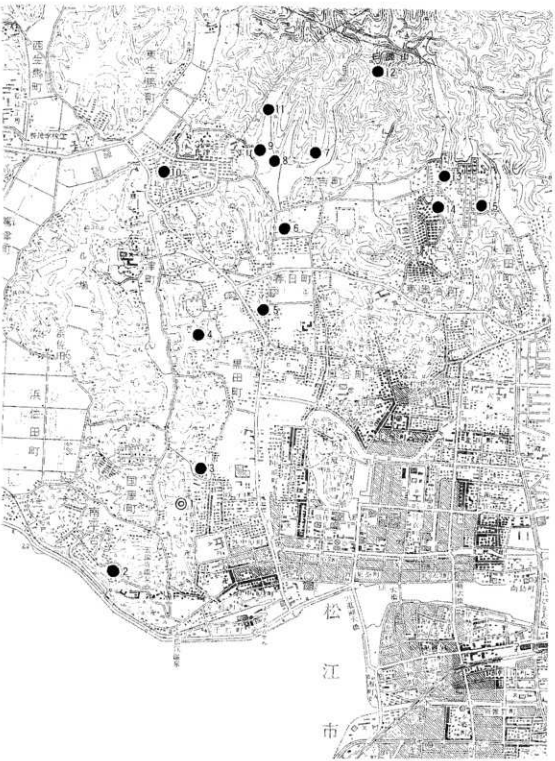
註２．風土記の丘資料館　「弥生土器集成（風土記の丘研究紀要Ⅰ）」1977年

註３．松江市教育委員会　「伝宇牟加比売命御陵古墳」1993年

註４．島根県教育委員会　「岡田薬師古墳」1986年

註５．近藤　正　「松江・とねり坂横穴群（島根県埋蔵文化財調査報告第Ⅰ集）」1969年

註６．松江市教育委員会　「荒隈城跡」1982年



1．向遺跡
2．荒隈城跡
3．とねり坂横穴群
4．春日遺跡
5．法吉小学校裏山横穴群
6．法吉遺跡
7．伝宰牟加比売命御陵古墳
8．下り松遺跡
9．田中谷古墳
10．月廻古墳群
11．田中谷遺跡
12．白髪城跡
13．二反田古墓
14．岡田薬師古墳
15．松ヶ峠古墳

第３図　向遺跡と周辺の遺跡

Ⅲ. 調 査 の 概 要

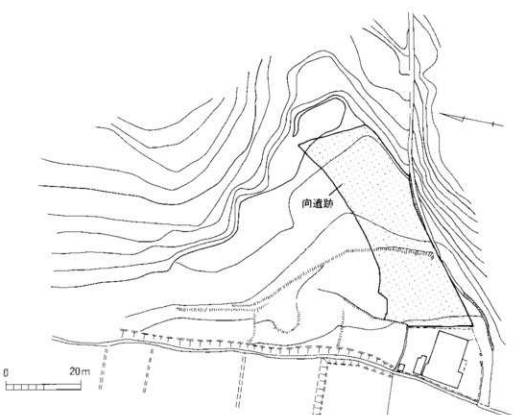
調査の方法と経過

向遺跡は月照寺と法眼寺の立地する低丘陵の西側谷筋の低湿地に位置する。標高は14m～16mを測る。

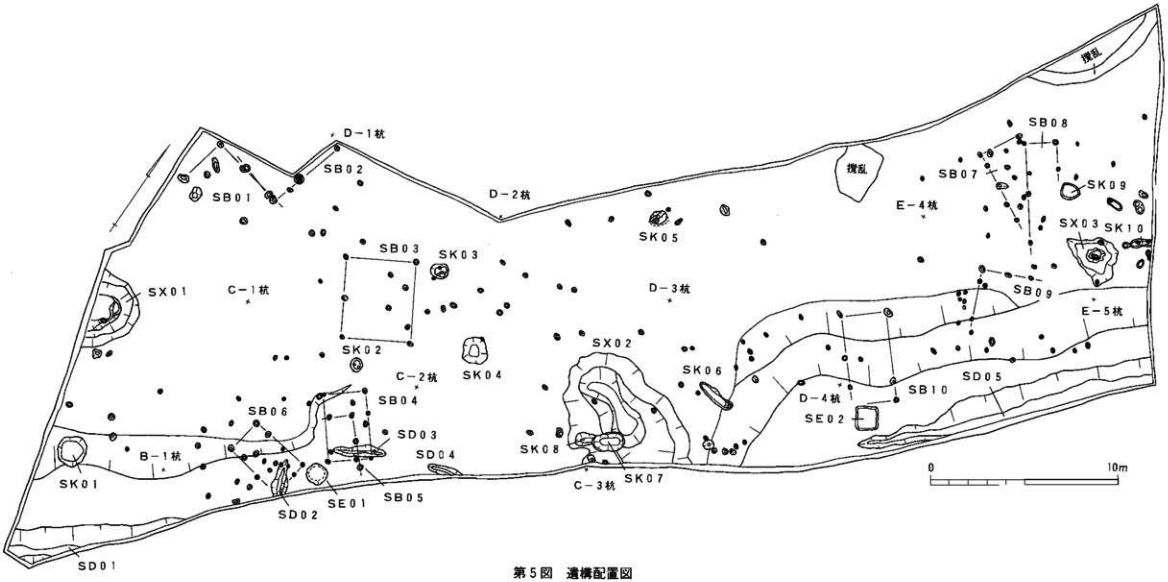
5月10日、試掘調査の結果に基き、遺物包含層までをバックフォー（重機）1台で掘削した後、1辺10m間隔の方眼区画を設定した。方眼区画は南西から北西に向かってA・B・C・D・E、北西から北東に向かって1・2・3・4・5・6とした。呼称はアルファベットに続けて、例えばA－1区、B　2区となる。

当初、排土は随時トラックで宅地造成地外に搬出する予定だったが、調査区の東側1/3を残土置場とし、残土がたまった時点で調査済み区域を埋め、2回に分けて調査を行った。

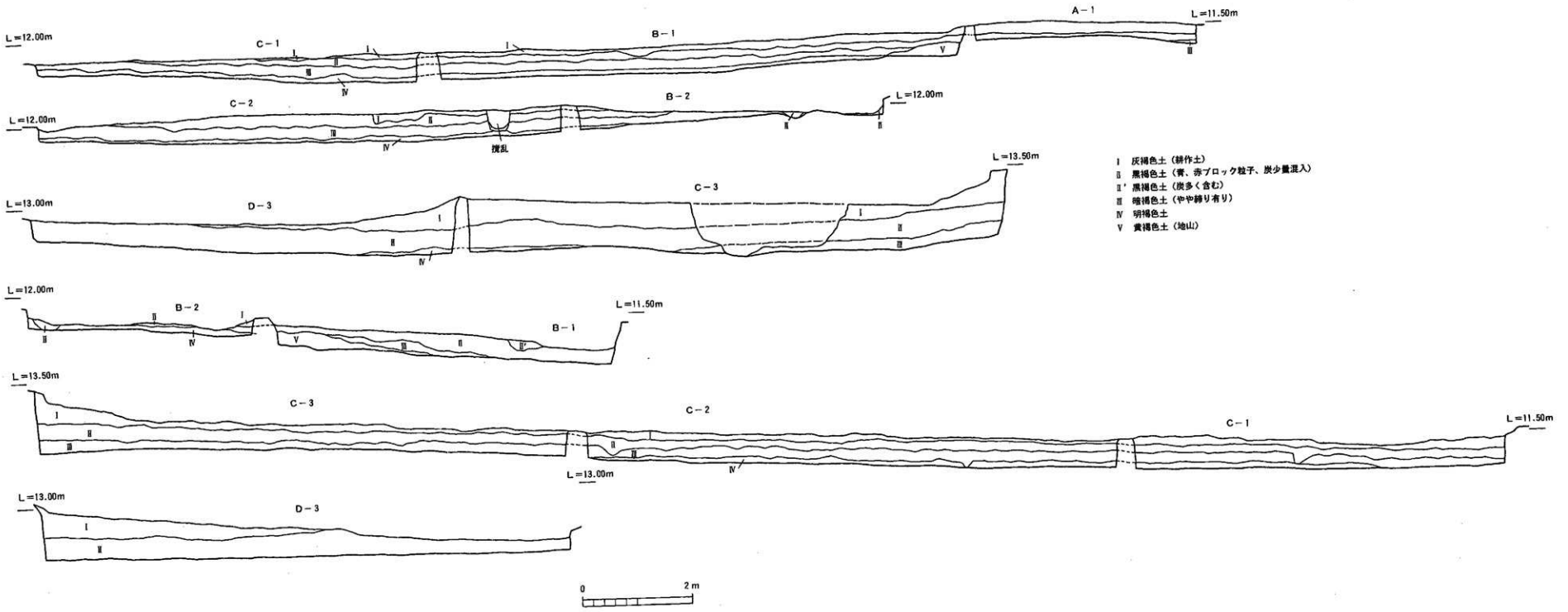
5月11日、A－1区から開始し、順次東へ向って調査した。8月12日、C－5区～D－4区までを調査し、掘立柱建物6棟、土壙8基、溝状遺構4条、不明遺構2、井戸状遺構2を検出した。ここまでの時点で度重なる長雨の影響で作業が遅延し、加えて調査終了期限が迫ってきたため、残りの調査区はバックフォーで遺構検出面まで掘削し、調査を8月31日まで行った。検出遺構は合計、掘立柱建物10棟、溝状遺構5条、不明遺構3、井戸状遺構2となった。また遺物は58cm×40cm×24cmの容量のコンテナ3箱分出土した。



第4図　向遺跡周辺の地形測量図


D−1杭
SB02
SB01
D−2杭
撹乱
SB08
SB07
SK09
E−4杭
SX03
SK10
SK05
SB03
SK03
SX01
C−1杭
D−3杭
SB09
E−5杭
SK02
SX02
SK04
C−2杭
SK06
SD05
SB10
D−4杭
SE02
SB04
SB06
SD03
SK08
B−1杭
SD04
SK01
SE01
SB05
C−3杭
SK07
SD02
SD01
0
10m

第5図　遺構配置図

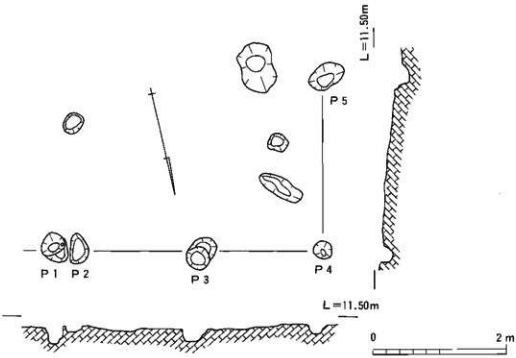

L=12.00m
C－1
B－1
A－1
L=11.50m
L=12.00m
C－2
B－2
L=12.00m
攪乱
L=13.00m
D－3
C－3
L=13.50m
L=12.00m
B－2
B－1
L=11.50m
L=13.50m
C－3
C－2
C－1
L=11.50m
L=13.00m
L=13.00m
D－3
0
2 m
Ⅰ 灰褐色土（耕作土）
Ⅱ 黒褐色土（青、赤ブロック粒子、炭少量混入）
Ⅱ' 黒褐色土（炭多く含む）
Ⅲ 暗褐色土（やや締り有り）
Ⅳ 明褐色土
Ⅴ 黄褐色土（地山）

第６図　土層断面図

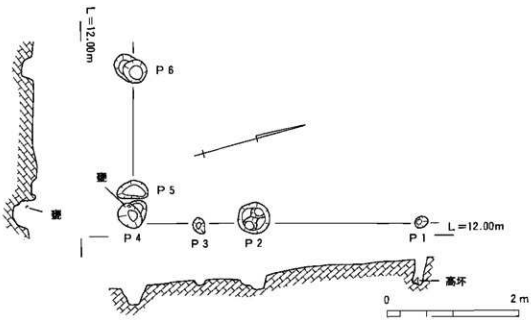
1．掘立柱建物

ＳＢ01（第７図）　Ｃ－１区で検出した。ＳＢ02と切り合い、本建物の方が先行する。P1からP5まで５個の柱穴を検出した。柱間寸法はP1～P2が26cm、P2～P3が188cm、P3～P4が180cm、P4～P5が268cmを測る。北側桁行残存長P1～P4は394cm、西側梁行残存長P4～P5は268cmを測るが南東部が欠落しており、建物の規模は不明である。各柱穴について、P1は深さ28cmを測る。P2は平面形が不整楕円形で長軸50cm、短軸29cm、深さ10cmを測る。P3は深さ21cmを測る。P4は平面形が円形で直径28cm、深さ20cmを測る。P5は平面形が不整楕円形で長軸56cm、短軸35cm、深さ24cmを測る。桁行方位はＮ－77°－Ｗである。埋土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

ＳＢ02（第８図）　Ｃ－１～２区で検出した。ＳＢ01と切り合い、後出する。P1からP6まで６個の柱穴を検出した。柱間寸法はP1～P2が258cm、P2～P3が72cm、P3～P4が100cm、P4～P5が40cm、P5～P6が180cmを測る。東側桁行残存長P1～P4は430cm、南側梁行残存長P4～P6は220cmを測るが、北西部が欠落しており、建物の規模は不明である。各柱穴については、P1は平面形が楕円形で長軸22cm、短軸17cm、深さ41cmを測る。P2は平面形が不整円形で直径48cm、深さ８cmを測る。底面に直径14cm、深さ10cmの円形のピットを２個穿つ。P3は平面形が不整円形で直径20cm、深さ11cmを測る。P4は平面形が不整楕円形で長軸50cm、短軸40cm、深さ23cmを測る。底面南隅に直径32cm、深さ12cmの円形のピットを穿つ。P5は平面形が不整楕円形で長軸47cm、短軸30cm、深さ11cmを測る。P6は平面形が楕円形で長軸52cm、短軸37cm、深さ11cmを測る。底面北隅に直径32cm、深さ８cmの円形のピットを穿つ。桁行方位はＮ－14°－Ｅである。埋土は黒褐色土である。遺物はP1の底面より古式土師器の高杯の脚部、P4の埋土より須恵器の甕片が出土した。



第７図　ＳＢ０１平面図



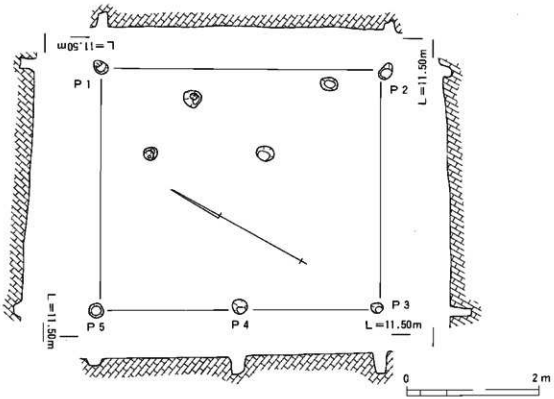
第8図　ＳＢ０２平面図

遺　物　（第14図１）は須恵器の甕片である。外面に平行叩き、内面に円弧叩きを施す。（２）は坏部の欠損した古式土師器の高坏である。残存高8.6cm、底径12cmを測る。器壁は薄く、脚部の３方向に円孔を穿つ。色調は赤褐色。胎土はやや粗く、１mm未満の白色細砂粒を多く含む。焼成は良好であるが風化しており、調整は不明であるが、内面にしぼり痕が確認できる。

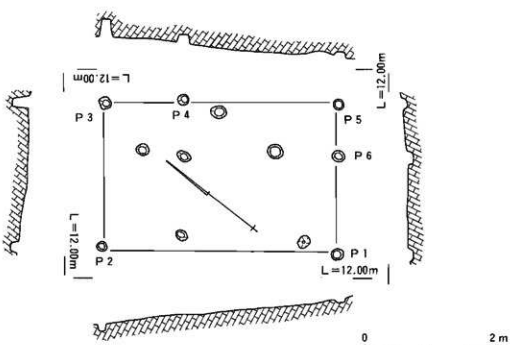
ＳＢ03（第９図）　Ｃ－２区で検出した。P1からP5まで５個の柱穴を検出した。柱間寸法はP1～P2が422cm、P2～P3が360cm、P3～P4が208cm、P4～P5が216cm、P5～P1が366cmを測る。北側梁行P5～P1が366cm、東側桁行P1～P2が422cm、南側梁行P2～P3が360cm、西側桁行P3～P5が424cmであり、桁行２間、梁行１間の掘立柱建物と思われる。柱穴についてはP1は平面形が不整楕円形で長軸24cm、短軸18cm、深さ26cmを測る。P2は平面形が不整楕円形で長軸26cm、短軸18cm、深さ21cmを測る。P3は平面形が円形で直径16cm、深さ38cmを測る。P4は平面形が円形で直径22cm、深さ30cmを測る。P5は平面形が円形で直径26cm、深さ12cmを測る。桁行方位はN－33°－Wである。埋土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

ＳＢ04（第10図）　Ｂ－２区で検出した。ＳＤ03と切り合うが前後関係は不明である。P1からP6まで６個の柱穴を検出した。柱間寸法はP1～P2が352cm、P2～P3が224cm、P3～P4が120cm、P4～P5が234cm、P5～P6が78cm、P6～P1が150cm、北側梁行P2～P3が224cm、東側桁行P3～P5が354cm、南側梁行P5～P1が228cm、西側桁行P1～P2が352cmであり、桁行２間、梁行２間の掘立柱建物と思われる。柱穴についてはP1は平面形が円形で直径18cm、深さ７cm、P2は平面形が円形で直径14cm、深さ12cmを測る。P3は平面形が不整円形で直径18cm、深さ31cmを測る。P4は平面形が円形で直径17cm、深さ10cm、P5は平面形が円形で直径16cm、深さ９cmを測る。P6は平面形が円形で直径18cm、深さ10cmを測る。桁行方位はN－37°　Wである。埋土はP2が赤褐色土で、他は黒褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＢ05（第11図）　Ｂ－２区で検出した。ＳＤ03と切り合うが前後関係は不明である。P1からP4まで４個の柱穴を検出した。柱間寸法はP1～P2が136cm、P2～P3が138cm、P3～P4が122cmを測る。北側梁

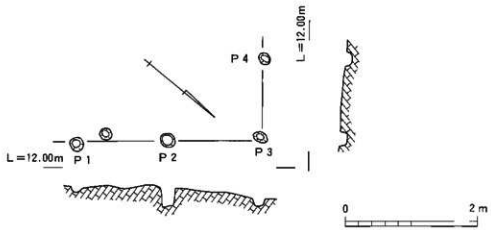


第９図　ＳＢ０３平面図



第10図　ＳＢ０４平面図

行残存長P3～P4が122cm、東側桁行残存長P1～P3が274cmを測るが、南西部が欠落しており、建物の規模は不明である。柱穴についてはP1は平面形が円形で直径20cm、深さ８cm、P2は平面形が円形で直径23cm、深さ21cm、P3は平面形が楕円形で長軸22cm、短軸16cm、深さ14cm、P4は平面形が不整円形で直径18cm、深さ16cmを測る。桁行方位はＮ－41°－Ｗである。埋土はP2が灰褐色土で、他は黒褐色土で



第11図　ＳＢ０５平面図

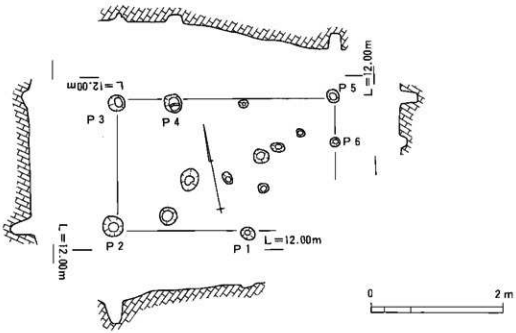
ある。遺物は出土していない。

ＳＢ06（第12図）　Ｂ－２区で検出した。ＳＤ02と切り合い、先行するものと思われる。P1からP6まで６個の柱穴を検出した。柱間寸法はP1～P2が200cm、P2～P3が196cm、P3～P4が84cm、P4～P5が235cm、P5～P6が66cmを測る。北側桁行P3～P5が319cm、東側梁行残存長P5～P6が66cm、南側桁行残存長P1～P2が200cm、西側梁行P2～P3が196cmであり、桁行２間、梁行２間の掘立柱建物と思われる。柱穴についてはP1は平面形が不整円形で直径20cm、深さ５cm、P2は平面形が円形で直径30cm、深さ40cm、P3は平面形が円形で直径24cm、深さ11cm、P4は平面形が不整円形で直径28cm、深さ25cm、P5は平面形が円形で直径18cm、深さ27cm、P6は平面形が円形で直径14cm、深さ11cmを測る。桁行方位はＮ－79°－Ｗである。埋土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

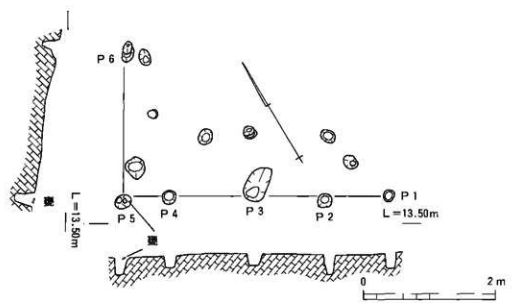
ＳＢ07（第13図）　Ｅ－５区で検出した。P1からP6まで６個の柱穴を検出した。柱間寸法はP1～P2が96cm、P2～P3が110cm、P3～P4が126cm、P4～P5が66cm、P5～P6が224cmを測る。西側梁行残存長P5～P6は224cm、南側桁行残存長P1～P5は398cmを測るが、北東部が欠落しており、建物の規模は不明である。各柱穴についてはP1は平面形が円形で直径16cm、深さ24cm、P2は平面形が不整円形で直径22cm、深さ33cm、P3は平面形が不整楕円形で長軸58cm、短軸31cm、深さ19cm、P4は平面形が円形で直径20cm、深さ20cm、P5は平面形が円形で直径22cm、深さ28cm、P6は平面形が不整楕円形で長軸32cm、短軸18cm、深さ７cmを測る。底面北隅に長軸20cm、短軸14cm、深さ17cmの楕円形のピットを穿つ。桁行方位はＮ－58°－Ｗである。埋土は黒褐色土で、遺物はP5の埋土より古式土師器の甕片と思われるものが出土した。

遺　物　（第14図３）は古式土師器の甕と思われる。残存高4.9 cmを測る。色調は淡橙色、胎土はやや粗く、白色細砂粒を多く含む。焼成は不良で磨耗が著しく、内面にヘラ削り痕を確認したのみである。

ＳＢ08（第15図）　Ｅ－５区で検出した。P1からP5まで５個の柱穴を検出した。柱間寸法はP1～P2が260cm、P2～P3が264cm、P3～P4が168cm、P4～P5が144cmを測る。北側桁行残存長P4～P5は144cm、西側梁行P3～P4が168cm、南側桁行残存長P1～P3は524cmを測るが、南東部が欠落しており、建物の規模は不明である。各柱穴についてはP1は平面形が不整円形で直径20cm、深さ８cmを測る。底面南隅に長軸16cm、短軸14cm、深さ18cmの楕円形のピットを穿つ。P2は平面形が円形で直径24cm、深さ11cm、P3は平面形が楕円形で長軸20cm、短軸17cm、深さ17cm、P4は平面形が楕円形で長軸28cm、短軸21cm、深



第12図　ＳＢ０６平面図

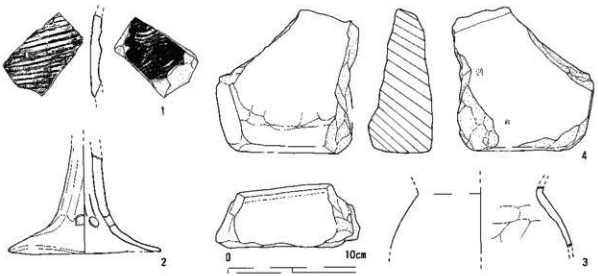


第13図　ＳＢ０７平面図

さ８cmを測る。底面南隅に直径12cm、深さ14cmの円形のピットを穿つ。P5は平面形が不整円形で直径14cm、深さ10cmを測る。桁行方位はN－34°－Wである。埋土は黒褐色土で、遺物はP2の検出面に加工痕を施した石が出土した。

遺　物　（第14図４）は砂岩片である。11.3cm×10cm×５cmを測る。３方向が面取りされ、１方向に抉り痕が確認された。

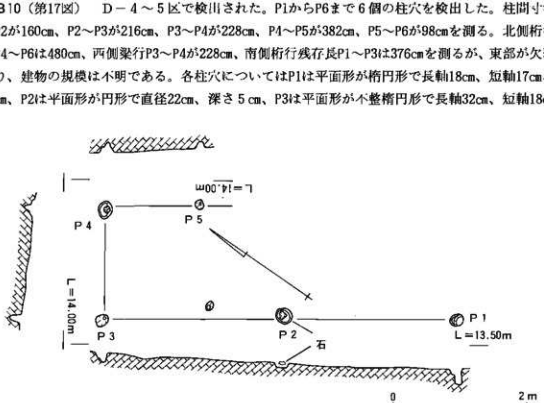
ＳＢ09（第16図）　Ｄ－５区で検出した。P1からP5まで５個の柱穴を検出した。柱間寸法はP1～P2が200cm、P2～P3が68cm、P3～P4が150cm、P4～P5が116cmを測る。北側梁行残存長P3～P5は266cm、西側桁行長P1～P3は268cmを測るが、南東部が欠落しており、建物の規模は不明である。各柱穴について



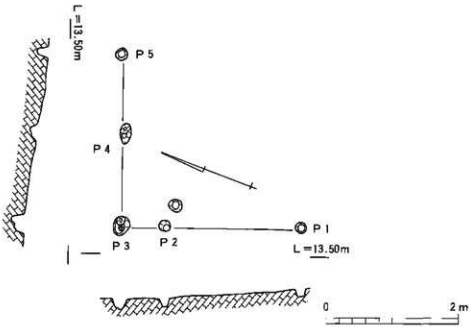
第14図　ＳＢ０２．０７．０８出土遺物実測図、縮尺$\frac{1}{4}$

はP1は平面形が円形で直径16cm、深さ12cm、P2は平面形が円形で直径18cm、深さ19cm、P3は平面形が楕円形で長軸28cm、短軸23cm、深さ14cmを測る。底面に直径12cmと８cm、深さ６cmと3.8cmの円形のピットを穿つ。P4は平面形が楕円形で長軸30cm、短軸17cm、深さ19cmを測る。底面東隅に直径14cm、深さ８cmの円形のピットを穿つ。P5は平面形が円形で直径18cm、深さ15cmを測る。桁行方位はＮ－20°－Ｗである。埋土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

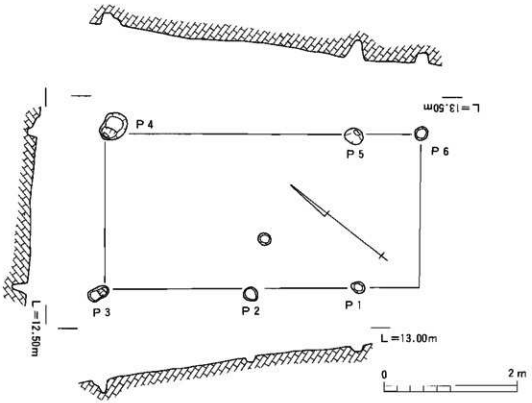
ＳＢ10（第17図）　Ｄ－４～５区で検出された。P1からP6まで６個の柱穴を検出した。柱間寸法はP1～P2が160cm、P2～P3が216cm、P3～P4が228cm、P4～P5が382cm、P5～P6が98cmを測る。北側桁行残存長P4～P6は480cm、西側梁行P3～P4が228cm、南側桁行残存長P1～P3は376cmを測るが、東部が欠落しており、建物の規模は不明である。各柱穴についてはP1は平面形が楕円形で長軸18cm、短軸17cm、深さ５cm、P2は平面形が円形で直径22cm、深さ５cm、P3は平面形が不整楕円形で長軸32cm、短軸18cm、



第15図　ＳＢ０８平面図



第16図　ＳＢ０９平面図



第17図　ＳＢ１０平面図

深さ15cmを測る。底面東隅に直径16cm、深さ４cmの円形のピットを穿つ。P4は平面形が不整楕円形で長軸44cm、短軸32cm、深さ13cmを測る。底面西隅に長軸20cm、短軸14cm、深さ３cmの楕円形のピットを穿つ。P5は平面形が楕円形で長軸28cm、短軸22cm、深さ33cm、P6は平面形が円形で直径20cm、深さ15cmを測る。桁行方位はＮ－38°－Ｗである。埋土は黒褐色土である。遺物は出土していない。

2．溝状遺構

ＳＤ01（第18図）　Ａ～Ｂ－１・２区で検出した。東西方向に検出し、その延長は調査区外にある。規模は残存長962cm、上端幅145cm、下端幅20～30cm、深さ15cmを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

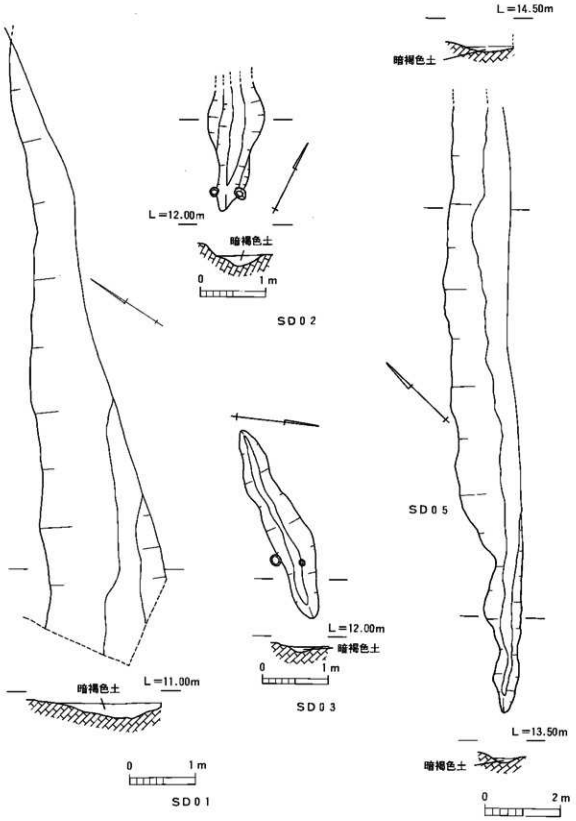
ＳＤ02（第18図）　Ｂ－２区で検出した。一部のみの検出で南側は調査区外に展開する。検出部分での規模は長さ190cm、幅50cm～64cm、深さ10～14cmを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

ＳＤ03（第18図）　Ｂ－２・３区で検出した。東西方向に検出し、長さ180cm、幅40cm～60cm、深さ５～８cmを測る浅い溝である。埋土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

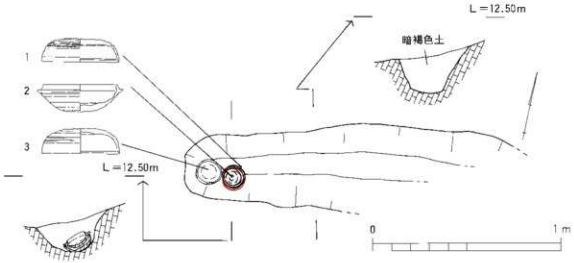
ＳＤ04（第19図）　Ｂ－３区で検出した。一部のみの検出で東側は調査区外に展開する。検出部分での規模は長さ175cm、幅30～45cm、深さ25cmを測る。断面形はＵ字型を呈する。埋土は暗褐色土である。先端部付近より須恵器の坏身と坏蓋がセットで３個、完形で出土した。坏蓋は倒立で出土。

遺　物　（第20図１）は須恵器の坏蓋である。口径12.9cm、器高3.9cmを測る。天井部はほぼ平坦で、天井部と体部の境に１条の凹線と１条の沈線を施す。口縁部は垂直に下り、端部を丸くおさめる。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は多方向ナデ、他は回転ナデを施す。色調は外面淡青灰色、内断面灰色。胎土は密で、１mm未満の白色細砂粒を少量含む。焼成は良好で堅緻。（２）は須恵器の坏身である。口径14.4cm、たち上り径12.4cm、器高4.4cmを測る。底部は丸く、体部は内弯して上り、受部は外方向に伸びる。たち上りは内傾し、焼分長い。口縁端部を丸くおさめる。底部外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデ後静止ナデ、他は回転ナデを施す。風化している色調は灰色。胎土はやや粗く、２mm未満の白色砂粒を多く含む。焼成はやや不良で軟質である。（３）は須恵器の坏蓋である。口径13.1cm、器高4.1cmを測る。天井部はほぼ平坦で、天井部と体部の境付近に１条の凹線と１条の沈線を施す。口縁部はほぼ垂直に下り、端部を丸くおさめる。口縁内側に段を有す。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は多方向ナデ、他は回転ナデを施す。風化している色調は灰色。胎土は密で、１mm未満の白色砂粒を少量含む。焼成はやや不良で、軟質である。

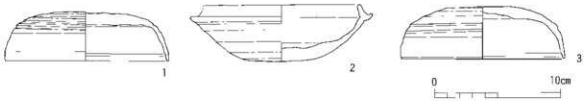
ＳＤ05（第18図）　Ｃ～Ｄ－５区で検出した。一部のみの検出で東側は調査区外に展開する。検出部分での規模は長さ32.2cm、残存幅１～3.4cm、深さ10cmを測る。断面形は浅いレンズ状を呈する。埋土は暗褐色土で、遺物は出土していない。



第18図　SD01．02．03．05平面図



第19図　ＳＤ０４平面図



第20図　ＳＤ０４出土遺物実測図、縮尺$\frac{1}{3}$

3．土壙

ＳＫ01（第21図）　Ａ－１区で検出した長軸334cm、短軸310cm、深さ100～120cmの楕円形の土壙である。壁面はほぼ垂直に下り、底面はほぼ平坦である。埋土は茶褐色土を基調とし、自然堆積による埋没と思われる。遺物は上層より須恵器の甕片、坏の口縁部、染付磁器の皿、下層より緑釉陶器が出土した。

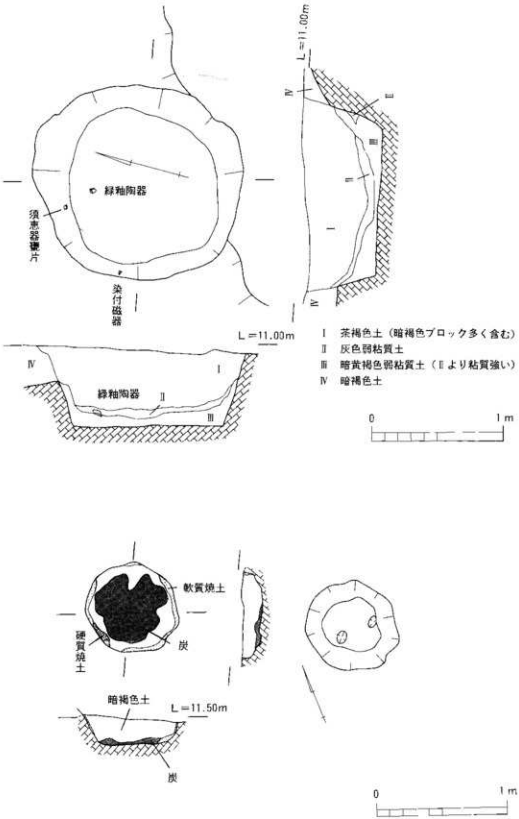
遺　物　（第24図１）は須恵器の甕片である。３条の凹線と、その下に波状紋を施す。色調は青灰色で、胎土は密である。焼成は良好で堅緻。（２）は須恵器の坏の口縁部片である。残存高2.2cmを測る。口縁部付近に窪みを有し、口縁端部を丸くおさめる。色調は灰色で、胎土は密である。焼成は良好。（３）は緑釉陶器の碗である。残存高4.8cmを測る。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。口縁内側に２条の沈線を施す。（４）は染付磁器の皿である。復元口径13.6cm、残存高2.8cmを測る。見込み部と体部内面に絵文様を描く。

ＳＫ02（第21図）　Ｂ－２区で検出した長軸144cm、短軸138cm、深さ28～32cmの不整円形の焼土壙である。壁面に焼け痕が残り、底面には炭化物が薄く堆積していた。埋土は暗褐色土を基調とし、遺物は検出していない。竈の使用が想定されるが、時期は不明である。

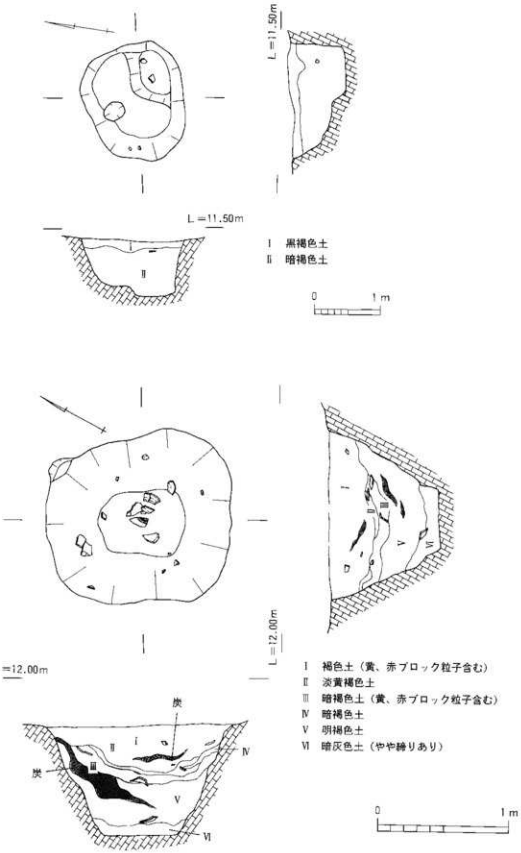
ＳＫ03（第22図）　Ｃ－２区で検出した長軸182cm、短軸154cm、深さ60～88cmの略円形の土壙である。底部に段差がある。埋土は暗褐色土を基調とし、自然堆積による埋没と思われる。埋土中より土師器の細片が数点出土したが、図示できるものではなかった。

ＳＫ04（第22図）　Ｃ－３区で検出した長辺138cm、短辺120cm、深さ86cmの隅丸長方形の土壙である。底面は平坦で、掘り込みはきつく立ち上る。埋土は明褐色土を基調とし、自然堆積による埋没と思われる。遺物は埋土中より土師器の甕片、須恵器の無高台坏、平瓶、土師質土器の無高台坏が出土している。

遺　物　（第24図５）は須恵器の無高台坏である。復元口径11.4cm、器高3.8cm、復元底径７cmを測る。底部はやや上げ底で、体部はほぼ直線的に外上方に伸び、口縁端部を丸くおさめる。底部外面に糸切り痕が残り、内面は静止ナデ、他は回転ナデを施す。色調は灰色。胎土は密で、１mm未満の白色砂粒を少量含む。焼成は良好。（６）は須恵器の平瓶である。残存高9.6cm、復元底径13.4cmを測る。底部はほぼ平坦で、胴部は直線的に外上方に伸びる。４条と３条の浅い沈線を施し、胴部最大径付近に突帯を有す。底部付近にヘラ条工具による切込みを施す。底部付近を回転ヘラ削り、他は回転ナデを施す。色調は灰色。胎土は密で、３mm未満の白色砂粒と石英粒を少量含む。焼成は良好。（７）は土師器の甕である。復元口径30cm、残存高６cmを測る。口縁部は端部付近で内傾し、端部を丸くおさめる。口縁内側に窪みを施す。外面に煤付着。外面に櫛条工具でハケ目、内面にヘラ削り、他は横ナデを施す。色調は茶褐色。胎土はやや粗く、２mm未満の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。（８）は土師器の甕片と思われる。残存高3.1cmを測る。口縁内側に窪みを施す。色調は淡橙色。胎土は粗く、２mm未満の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。風化しており、調整は不明であるが、口縁外面に横ナデ痕が確認された。（９）は土師質土器の無高台坏である。口径12.5cm、器高3.9cmを測る。底部は平坦で、体部は直線的に外上方に伸び、口縁端部を丸くおさめる。底部外面は回転糸切り、内面は静止ナデ、他は回転ナデを施す。風化している。色調は赤褐色、胎土は密である。焼成は良好である。



第21図　ＳＫ０１，０２平面図



第22図　ＳＫ０３．０４平面図

ＳＫ05（第23図）　Ｄ－３区で検出した長軸85cm、短軸70cm、深さ86cmの不整楕円形の土壙である。東側の壁面は抉り込まれている。埋土は明褐色土を基調とし、自然堆積による埋没と思われる。遺構の形状を勘案すると貯蔵穴になる可能性がある。遺物は上層に土師器の細片が出土したが、図示できるものではなかった。

ＳＫ06（第23図）　Ｃ－４区で検出した長軸210cm、短軸48cm、深さ30～40cmの隅丸長方形の土壙である。掘り込みはほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。埋土は単一土層であり、自然堆積による埋没と思われる。遺物は埋土より須恵器の坏蓋片と長頸壺片が出土している。

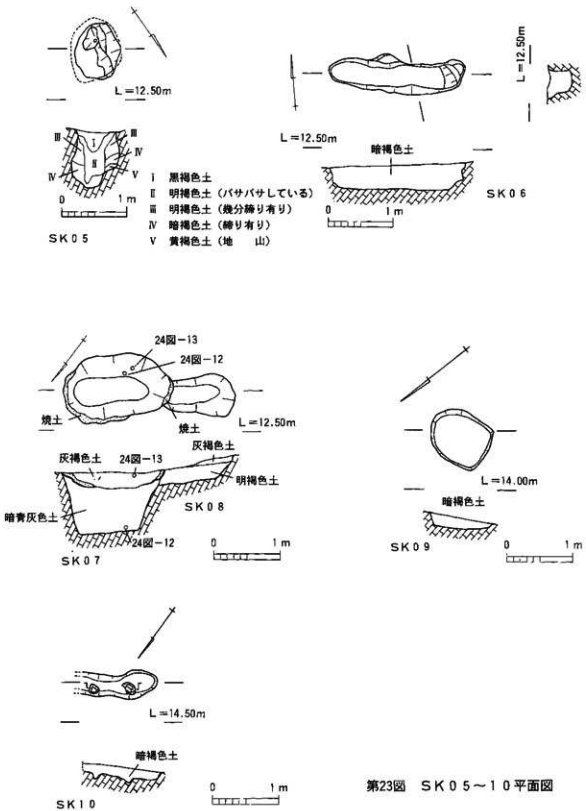
遺　物　（第24図10）は須恵器の坏蓋片である。復元口径14.8cm、残存高1.3cmを測る。口縁部は垂直に下がり、端部を丸くおさめる。調整は回転ナデである。色調は紫灰色、胎土は密で、２mm未満の白色砂粒を含む。焼成は良好。（11）は須恵器の長頸壺の基頸部片である。残存高3.5cmを測る。肩部は張っていて、調整は回転ナデである。色調は灰色、胎土は密で、白色細砂粒を少量含む。焼成は良好で堅緻である。

ＳＫ07・08（第23図）　Ｃ－３・４区で検出した。ＳＫ08はＳＫ07と切り合って、先行する。平面形は両方とも楕円形を呈する。ＳＫ07は長軸164cm、短軸94cm、深さ90cmを測る。掘り込みはきつく立ち上がり、底面はほぼ平坦である。上面に焼け痕が残る。ＳＫ08は長軸100cm、短軸68cm、深さ32cmを測る。掘り込みはきつく立ち上がり、底面はほぼ平坦である。遺物はＳＫ07の上層と下層から須恵器の無高台坏が出土している。

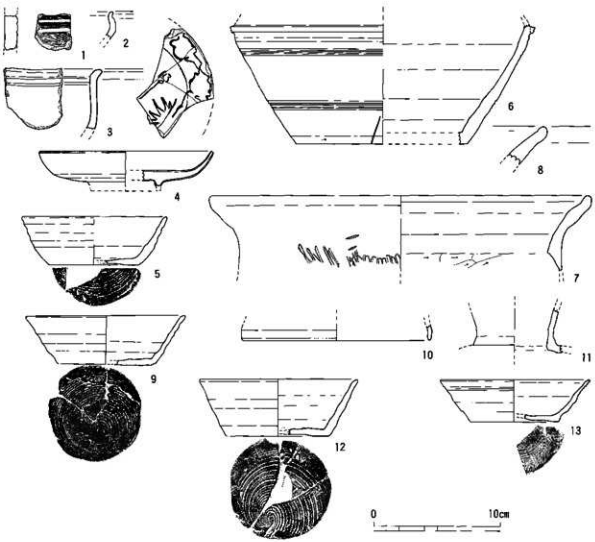
遺　物　（第24図12）は須恵器の無高台坏である。復元口径12.4cm、器高4.5cm、底径８cmを測る。底部はやや上げ底で、体部は直線的に外上方に伸び、口縁端部を丸くおさめる。底部外面は回転糸切り、内面は静止ナデ、他は回転ナデを施す。色調は灰色。胎土は密で、１mm未満の白色砂粒を少量含む。焼成はやや不良で軟質である。（13）も同器種である。復元口径11.6cm、器高3.3cm、復元底径6.8cmを測る。底部はやや上げ底。体部はほぼ直線的に外上方に伸び、口縁端部を丸くおさめる。底部外面に糸切り痕を残し、他は回転ナデを施す。色調は内外面暗青灰色、断面紫灰色である。胎土は密で、１mm未満の白色砂粒を極少量含む。焼成は良好で、堅緻である。

ＳＫ09（第23図）　Ｅ－５区で検出した長辺96cm、短辺78cm、深さ10～20cmの隅丸長方形の土壙である。掘り込みはほぼ垂直に立ち上がり、底面は傾斜している。埋土は単一土層であり、自然堆積による埋没とわれる。遺物は出土していない。

ＳＫ10（第23図）　Ｅ－５区で検出した。平面形は不整長方形を呈する。一部のみの検出で東側は調査区外に展開する。検出部分での規模は長辺116cm、短辺44cm、深さ40cmを測る。埋土は単一土層であり、自然堆積による埋没と思われる。遺物は出土していない。



第23図　ＳＫ０５～１０平面図

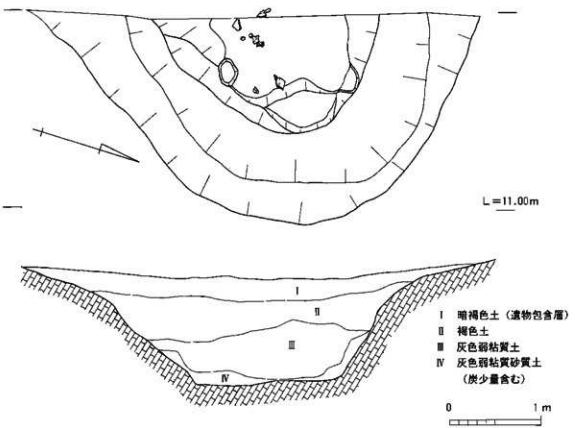


第24図　ＳＫ０１．０４．０６．０７出土遺物実測図、縮尺$\frac{1}{4}$

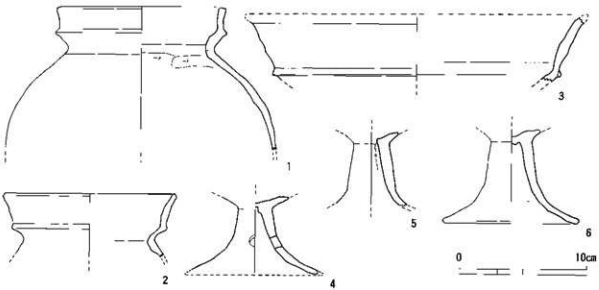
4．不明遺構

ＳＸ01（第25図）　Ｂ－１区より検出した。一部のみの検出で西側は調査区外に展開する。平面形は楕円形を呈すると思われ、検出した部分の規模は最大径は430cm、深さ132cmを測る。壁面は２段の稜を成して立ち上がり、底部はほぼ平坦である。埋土は４層に大別され、暗褐色土、褐色土、灰色弱粘性土、灰色砂質土（炭少量含む）の順に重なり、自然堆積による埋没と思われる。遺物は１層中から古式土師器の甕と高坏が出土した。

遺　物　（第26図１）は古式上師器の甕である。復元口径13.2cm、残存高11.3cmを測る。複合口縁を呈し、口縁部は僅かに外反し、口縁端部は平坦面をなす。器壁は厚い。風化の為、調整は不明であるが、内面にヘラ削り痕、口頸基部外面に横ナデ痕が確認できた。色調は内外面黄褐色、断面黒灰色。胎土はやや粗く、１mm未満の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。（２）も同器種である。復元口径13.6cm、残存高５cmを測る。複合口縁を呈し、口縁部は長く伸び、端部は平坦面をなす。風化の為、調整は不明。色調は黄褐色。胎土はやや粗く、１mm未満の白色砂粒を含む。（３～６）は古式上師器の高坏である。（３）は推定口径27cm、残存高5.1cmを測る。坏底部と体部の境に断面三角形の突帯を施す。



第25図　ＳＸ０１平面図

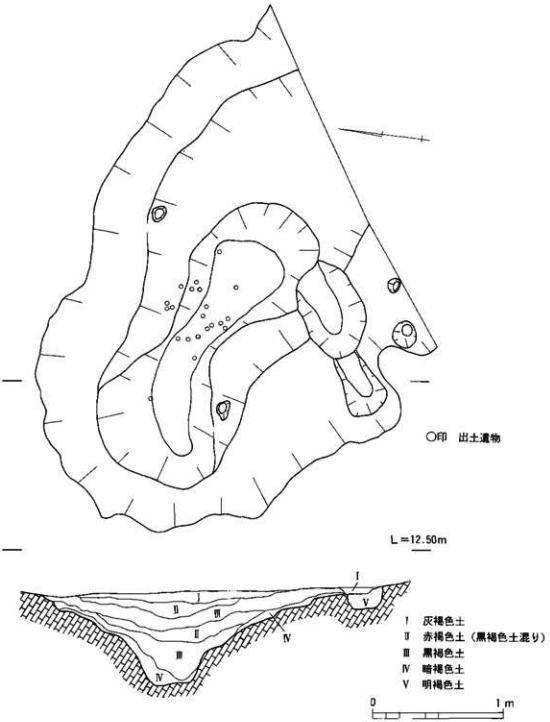


第26図　ＳＸ０１出土遺物実測図、縮尺$\frac{1}{4}$

体部は直線的に外上方に伸び、僅かに内傾して口縁部に至る。調整は横ナデを施す。色調は赤褐色。胎土は密で、白色細砂粒を多く含む。焼成は良好。（４）は残存高６cm、推定脚径11cmを測る。脚部の２方向に円孔を穿つ。風化の為、調整は不明。色調は淡橙色。胎土はやや粗く、２mm未満の白色砂粒、細砂粒を多く含む。焼成は不良である。（５）は残存高5.7cmを測る。風化の為、調整は不明であるが、しぼり痕が確認できた。色調は淡橙色。胎土はやや密で、白色細砂粒を多く含む。焼成は不良である。（６）は復元口径10.6cm、残存高7.5cmを測る。風化の為、調整は不明。色調は黄褐色。胎土はやや密で、白色細砂粒を多く含む。焼成は不良である。

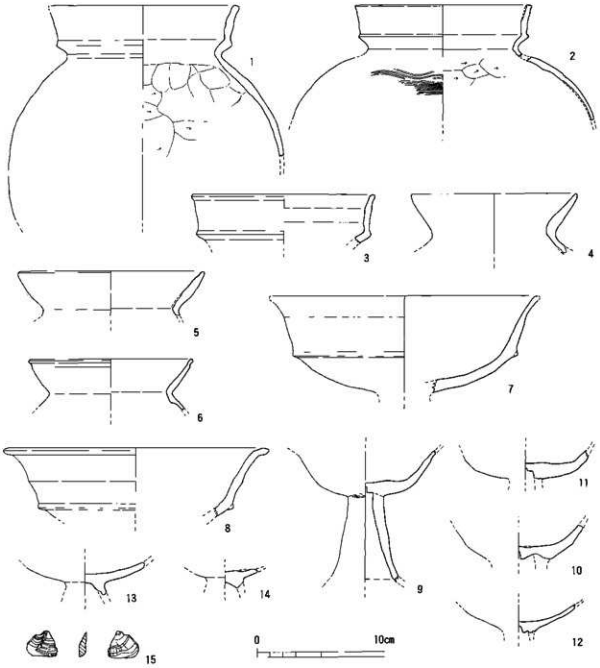
ＳＸ02（第27図）　Ｃ－３・４区で検出した。ＳＫ－07・08と切り合い、先行する。一部のみの検出で南側部分が調査区外に展開するため、遺構の全貌は知り得ない。検出した部分の規模は最大長は600cm、深さ146cmを測る。壁面はきつく立ち上がり、３段の稜を成す。底面はほぼ平坦で、埋土は赤褐色土と黒褐色土を基調とし、自然堆積による埋没と思われる。遺物は埋土及び壁面、底面直上から古式土師器の甕、高杯が出土した。

遺　物　（第28図１～６）は古式土師器の甕である。（１）は口径15cm、残存高17cmを測る。復合口縁を呈し、口縁部は僅かに外反して長く伸び、端部は平坦面をなす。器壁は厚い。風化の為、調整は不明であるが、内面にヘラ削り痕を確認できる。色調は黄褐色。胎土は密で、白色細砂粒を多く含む。焼成は良好。（２）は復元口径14cm、残存高9.2cmを測る。復合口縁を呈し、口縁部は僅かに外反し長く伸び、端部は平坦面をなす。肩部付近に波状紋とハケ目を施す。器壁は薄い。外面に煤付着。内面にヘラ削り、口縁部と肩部に横ナデを施す。色調は赤褐色。胎土はやや粗く、３mm未満の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。（３）は復元口径14.2cm、残存高3.9cmを測る。復合口縁を呈し、口縁部は長く、端部は平坦面をなす。外面に煤付着。色調は淡黄褐色で、胎土は密である。焼成は良好。（４・５）は復元口径13cm、14.6cm、残存高4.7cm、3.5cmを測る。単純口縁で、端部を丸くおさめる。風化の為、調整は不明。色調は（４）が内面赤褐色、外断面橙色、（５）が内外面赤褐色、断面黄褐色。胎土はやや密で、白色細砂粒を多く含む。焼成は不良。（６）は復元口径12.8cm、残存高４cmを測る。単純口縁で端部付近に凹線を施す。端部は平坦面をなす。色調は灰白色。胎土はやや密で、白色細砂粒



第27図　ＳＸ０２平面図

を多く含む。焼成は良好。（７～14）は古式土師器の高坏である。（７）は推定口径21cm、残存高7.7cm、（８）は復元口径20.8cm、残存高5.5cmを測る。坏底部と体部の境に断面三角形の突帯を有す。体部はほぼ直線的に外上方に伸び、口縁部は外反し、（８）は端部を丸くおさめる。風化の為、調整は不明。色調は淡橙色。胎土は粗く、２mm未満の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。（９）は残存高10.3cmを測る。坏底部にヘラ状工具による刺突痕を有す。脚基部内面に直径２mm、深さ５mmの刺突痕を有す。風化の為、調整は不明。色調は淡橙色で、胎土は密である。焼成は良好。（10・11）は残存高2.6cm、



第28図　ＳＸ０２出土遺物実測図、縮尺$\frac{1}{4}$

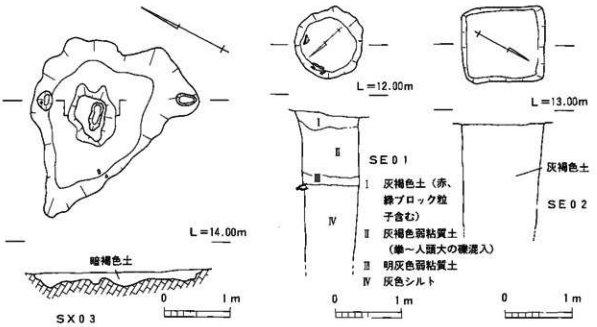
2.2cmを測る。円盤充塡の痕跡を認める。風化の為、調整は不明。色調は淡黄褐色。胎土はやや粗く、白色細砂粒を多く含む。焼成は（10）は良好、（11）は不良で、軟質である。（12）は残存高2.3cmを測る。脚某部内面に直径２mm、深さ３mmの刺突痕を有す。風化の為、調整は不明。色調は淡黄褐色。胎土はやや粗く、１mm未満の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。（13・14）は残存高2.6cm、1.4cmを測る。風化の為、調整は不明。色調は淡橙色、胎土は密で、白色細砂粒を含む。焼成は良好。（15）は青瑪瑙の石器未成品である。

ＳＸ03（第29図）　Ｄ～Ｅ－５区で検出した。平面形は不整三角形を呈する。長軸290cm、短軸240cm、深さ20～25cmを測る。底面は起伏がある。埋土は単一土層であり、自然堆積による埋没と思われる。遺物は須恵器の細片が出土しているが、図示できるものはなかった。

5．井戸状遺構

ＳＥ01（第29図）　Ｂ－２区で検出した。平面形は略円形を呈する。直径110cmを測る。湧き水の為、底面を確認するまでに至らず、検出した面までの深さは233cmである。壁面はきつく立ち上がる。遺物は上層から石油ランプのフードが完形で、下層の壁面からビール瓶が完形で出土した。近・現代の流れ込みと思われる。

ＳＥ02（第29図）　Ｃ－５区で検出した。平面形は長方形を呈する。長辺250cm、短辺230cmを測る。湧き水の為、底面を確認するまでに至らず、検出した面までの深さは164cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は灰褐色土を基調としており、自然堆積による埋没と思われる。



第29図　ＳＸ03．ＳＥ01．02平面図

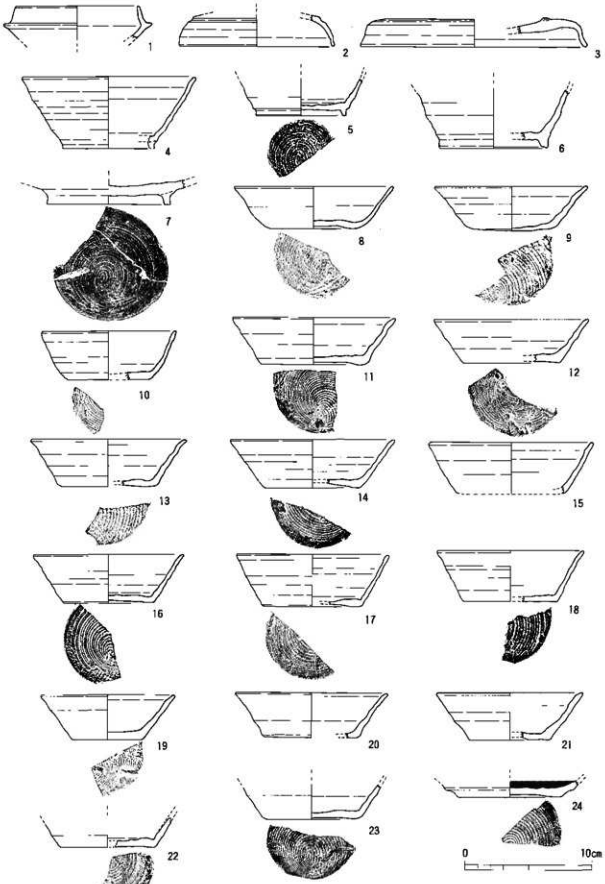
6．遺物

須恵器　（第30図１）は坏身である。復元口径11.8cm、復元たち上がり径9.6cm、残存高2.7cmを測る。受部は斜めに短く伸び、たち上がりは内傾し長く伸び、端部を丸くおさめる。調整は回転ナデを施す。色調は内外面青灰色、断面淡紫灰色。胎土は密で、１mm未満の白色砂粒を少量含む。焼成は良好で、堅緻。（２）は坏蓋である。復元口径12cm、残存高2.5cmを測る。天井部と体部の境に１条の凹線を施す。口縁部はほぼ垂直に下り、端部を丸くおさめる。調整は回転ナデを施す。色調は紫灰色で、胎土は密である。焼成はやや不良。（３）は壺、或いは盤などの蓋と思われる。復元口径17.8cm、残存高2.2cmを測る。天井部は窪んでいる。体部はほぼ垂直に下り、外傾して口縁部に至る。端部を丸くおさめる。天井部は回転ヘラ削り、他は回転ナデを施す。重ね焼き痕を残す。色調は内外面青灰色、断面紫灰色で、胎土は密。焼成は良好で、堅緻。（４～６）は高台付坏である。底部と体部の境に短い高台を有し、体部は直線的に外上方に伸びる。（４）は口縁端部を丸くおさめる。（５）は底部に回転糸切り痕を残す。（７）は盤である。残存高２cm、復元高台径9.6cmを測る。底部と体部の区切りがつかない箇所に高台を有す。底部に回転糸切り痕を残す。（８～24）は無高台坏である。復元口径10.6cm～13cm、器高3.3cm～4.1cm、復元底径5.2cm～８cmを測る。体部は直線的に外上方に伸び、口縁端部を丸くおさめる。底部外面に糸切り痕を残し、内面は回転ナデ後静止ナデを施す。他は回転ナデ。（８）の底部にヘラ記号を有す。（24）の内面に赤色塗彩が施されている。（第31図１～９）は無高台坏であるが、前記のものより口縁部が大きく広がり、口径に対して器高が低くなり、皿の形態に近くなる。復元口径12.6cm～16.8cm、器高1.7cm～2.2cm、復元底径6.8cm～9.6cmを測る。（10・11）は甕片である。（12）は甑である。（13～19）は壺である。（13）は直口壺、（14・18）は長頸壺、（19）は脚付小型壺と思われる。（16）の底部にヘラ記号「×」を有す。（20～23）は平瓶の把手である。３方向を丁寧にヘラ削りし１方向は指ナデ。（24）は平瓶の把手の取り付け基部である。（第32図１）は陶硯と思われる。（２）は須恵質の瓦片である。凸面に縄目文、凹面に布目文を施す。

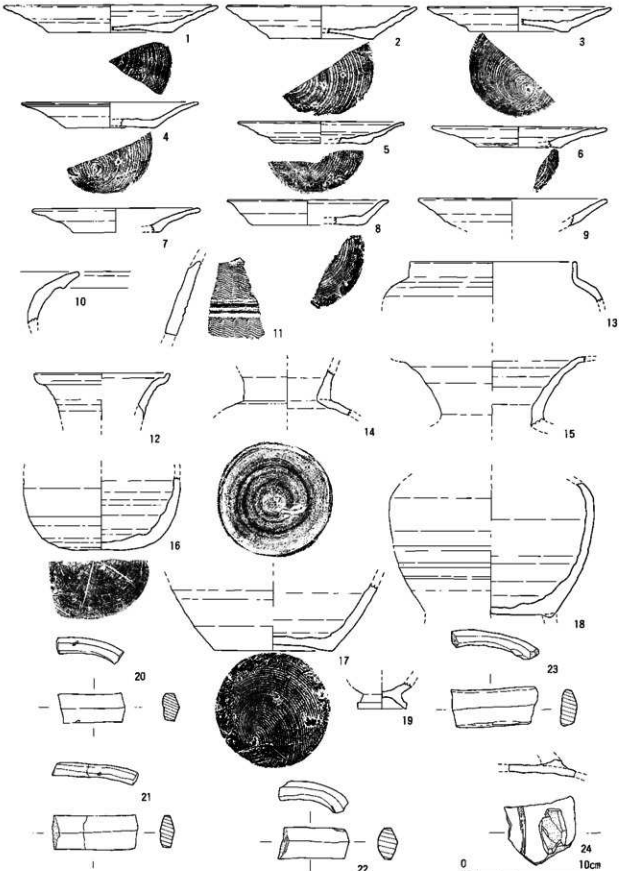
土師器　（３・４）は甕である。（３）は復元口径26.4cm、残存高4.9cmを測る。口縁部は長く内弯し、端部を丸くおさめる。口縁内側に窪みを有す。調整はヘラ削り、櫛状工具による縦ハケ目、他はナデを施す。（４）は復元口径26.6cm、残存高4.6cmを測る。口縁部は長く外反し、端部を丸くおさめる。口縁内側に窪みを有す。風化の為、調整は不明。（５～７）は壺である。（５）は復元口径12cm、残存高5.6cmを測る。複合口縁を呈し、口縁部は長く伸び、端部を丸くおさめる。器壁は厚い。風化の為、調整は不明だが、ヘラ削り痕が確認できた。（６）は復元口径11.8cm、残存高3.6cmを測る。複合口縁を呈し、口縁部は長く外反し、端部は平坦面をなす。器壁は薄い。風化の為、調整は不明。（７）は残存高6.5cmを測る。頸基部付近に１条の凹線を施す。凹線を中心に、上下にヘラ状工具による切込みを施す。切込みの下にハケ目を４条施す。風化の為、調整は不明。（８）は甑の把手と思われる。

土製品　（９～14）は上錘である。（15）は羽口と思われる。残存高8.3cmを測る。

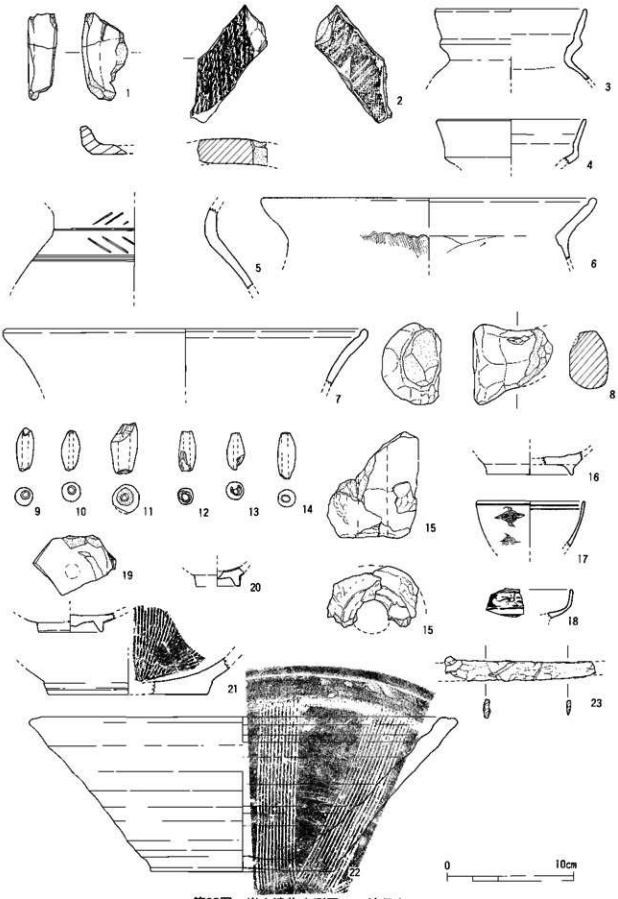
中・近世土器　（16）は土師質土器の高台付坏である。残存高1.8cm、復元高台径6.8cmを測る。底部と体部の境に短い三角高台を付す。風化の為、調整は不明。（17）は染付磁器の碗である。残存高3.6cm、復元口径8.6cmを測る。（18）は色絵磁器の碗である。残存高2.3cmを測る。（17・18）とも図柄は不明。（19）は唐津焼系統の陶器の碗と思われる。残存高2.3cm、復元高台径５cmを測る。素地は明



第30図　出土遺物実測図１、縮尺⅓（網部分は赤色塗彩を表わす）



第31図　出土遺物実測図２、縮尺$\frac{1}{4}$



第32図　出土遺物実測図３、縮尺$\frac{1}{3}$

黄褐色で、体部内外面に白釉がかかる。見込みに砂目痕を残す。削り高台である。(20) は白磁の碗である。残存高15cm、復元高台径3.4cmを測る。(21・22) は擂鉢である。(22) は復元口径33.6cm、器高12.2cm、復元底径14.4cmを測る。胴部内面に12条単位の条線を８本確認できる。口縁端部は平坦面をなし、沈線を１条施す。色調は灰白色。

鉄製品　(23) は刀子と思われる。残存長11.7cmを測る。

Ⅳ. ま と め

向遺跡では調査の結果、掘立柱建物10棟、土壙10基、溝状遺構５条、不明遺構３、井戸状遺構２基が検出された。以下、これらの遺構、遺物についてまとめてみたい。

掘立柱建物の立地は緩斜面と平坦面に位置する。規模は２間×１間、２間×２間のものが殆んどで、全容を確認できる建物はＳＢ０３、０４、０６の３棟のみである。遺物はＳＢ０２、０７、０８より古式土師器、須恵器が出土している。しかし、これでこれらの建物の平均的な規模、時期を断定することはできない。

溝状遺構はＳＤ０４から[註1]山陰須恵器編年Ⅲ期の坏身、坏蓋が出土した。調査区外に隆まりがあり、周溝の可能性もある。

焼土壙ＳＫ０２はＳＢ０３とＳＢ０４の間で検出された。遺構の状況から移動式の竈を使用したと思われる。ＳＫ０５は縦に深い土壙で、内壁が抉り込まれており、貯蔵穴かもしれない。ＳＫ０１、０４から出土した遺物がＡ－１区、Ｂ－２区出土の遺物と接合した為、流れ込みによるものと判断した。ＳＫ０７は検出面で火を焚いた痕跡が残り、奈良時代須恵器の無高台坏が検出面と床面直上から出土した。検出面の須恵器は破片であり、Ⅰ層と同層位から出土しており、流れ込みと思われる。床面直上の須恵器はほぼ完形で、出土状態から判断して埋納されたものと思われる。しかし、ＳＫ０７の形態は特徴的であり、幾つかの疑問点がある。埋納壙の上端を壁面が変質するまで強い火で燃やした理由は何か、葬送儀礼としての火化行為だったのか、等々で、現時点でＳＫ０７の性格を考察することはできない。

ＳＸ０１、０２とも大型土壙として分類できたが、規模が大きかったため不明遺構とした。ＳＸ０１の性格は不明である。１層中より[註2]小谷式の特徴を持つ土師器が数点出土しており、流れ込みによるものと思われる。ＳＸ０２の壁面、床面直上、埋土中より小谷式の特徴を持つ甕、高坏が出上した。高坏は図示できなかったものを含めると個体数で甕の２倍以上になる。出上状態から流れ込みというより、投棄されたものと思われる。性格は、調査中湧水が著しかったことから、集落内の水洗い場、水汲み場、そして廃棄場として利用されたと思われる。加えて、先の高坏の出上量から、祭祀遺物は出土していないが、水に係わる祭祀を行った可能性も否定できない。

遺物の内訳は須恵器が大部分を占め、以下土師器、土製品、中近世土器と続く。須恵器の器種は、２／３近くが無高台坏である。無高台坏は口径と器高との比率が小さいものと、口径に対して器高が

低くなる皿形態に近いものがある。奈良、平安時代にかかるものである。C－1区より羽口片が1点出土した。周辺から鉄滓等は出土していないことから、現位置から離れた地点に鍛冶遺構が存在すると思われる。調査区の立地条件から判断して月照寺からの流れ込みと思われるので、推測が過ぎることを恐れず述べれば、月照寺の地所内に鍛冶遺構の存在を示唆するものと思われる。類例として、松江城上御殿跡の小鍛冶遺構[註3]を挙げるものである。上御殿跡の小鍛冶遺構は、建物の造作の折りに臨時的に設置し、鉄釘等を作ったものと推察されており、松平家の廟所である月照寺においても当然、建物の造作、修理等は行った筈で、その際に鍛冶施設が置かれた可能性はあり得る。また中近世土器も同様に月照寺からの流れ込みと思われる。

これらのことから、向遺跡は古墳時代前期から平安時代まで、生活域として長期間に渡って営まれた集落遺跡である。

註1．　山本　清　「山陰の須恵器」（山陰古墳文化の研究）1971年

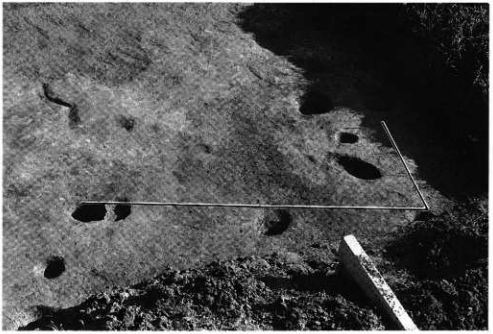
註2．　藤田憲司　「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」（考古学雑誌64－4）1979年

　　赤沢秀則　「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」（松江考古　第6号）1985年

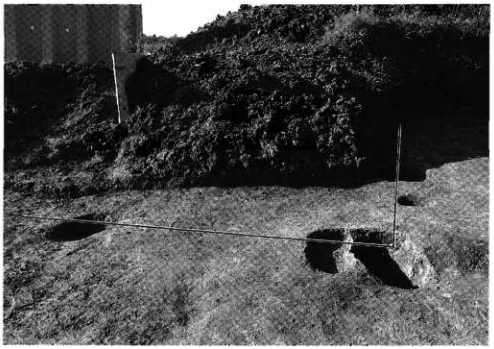
註3．　松江市教育委員会　「松江城上御殿跡」1987年

図　　版

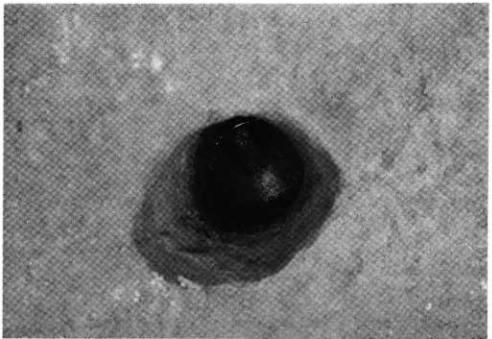
SB01
（北より見る）

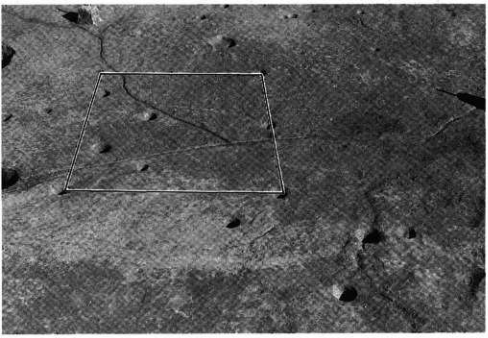


SB02
（南より見る）

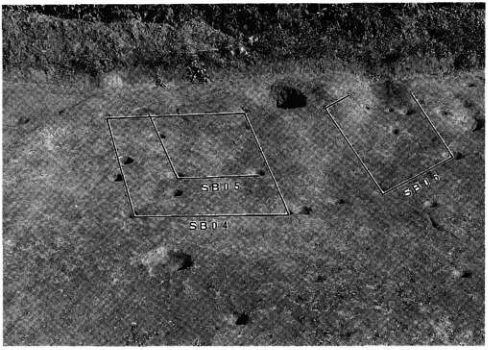


SB02
（遺物出土状況）

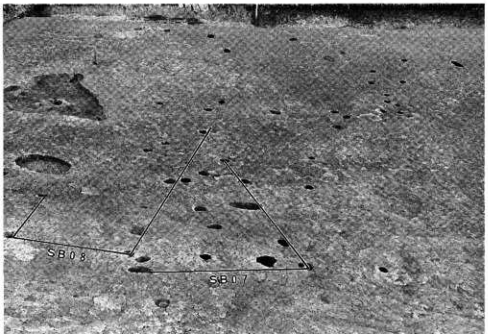




SB03
（北より見る）

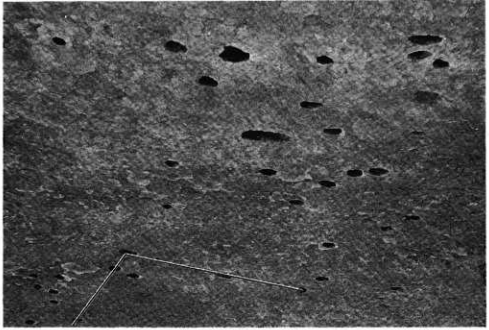


SB04．05．06
（北より見る）

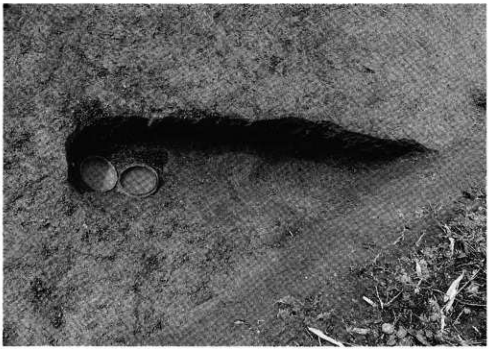


SB07．08
（北より見る）

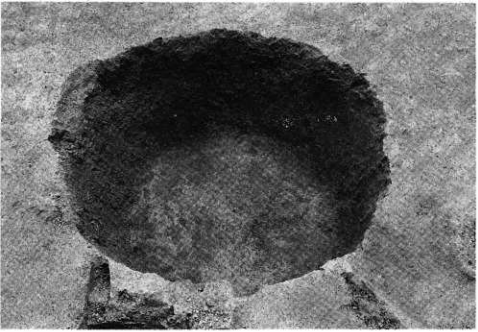
SB09
（南より見る）



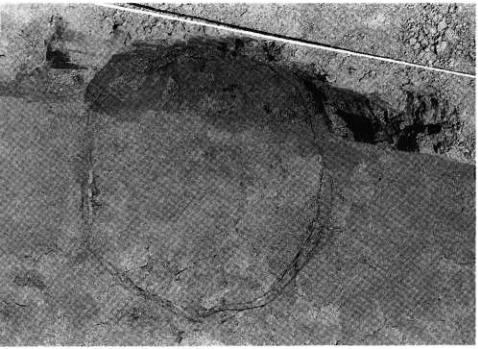
SD04
遺物出土状況



SD04
完堀後



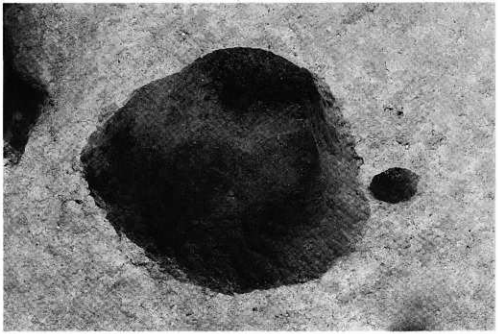
ＳＫ０１
完堀後



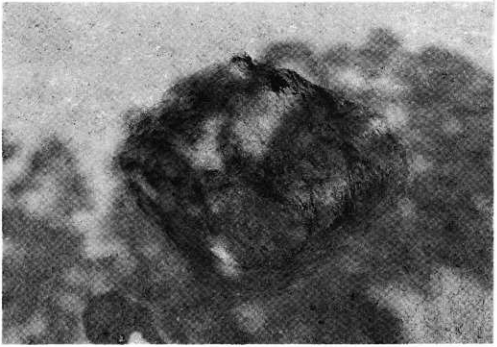
ＳＫ０２
検出状況

ＳＫ０２
完堀後

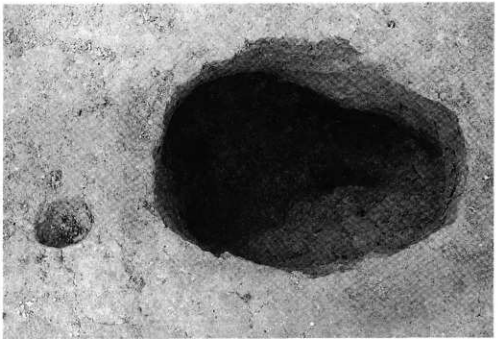
SK03
完掘後

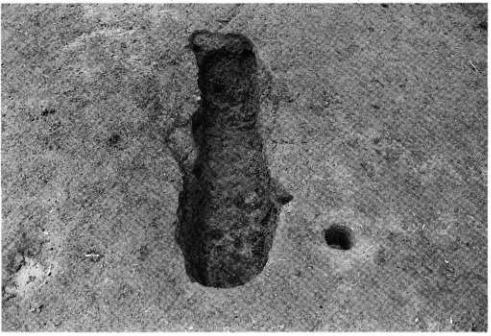


SK04
完掘後



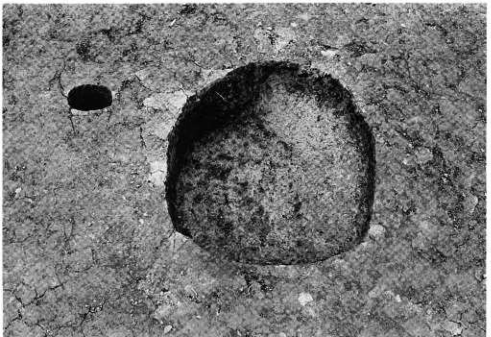
SK05
完掘後





SK06
完堀後

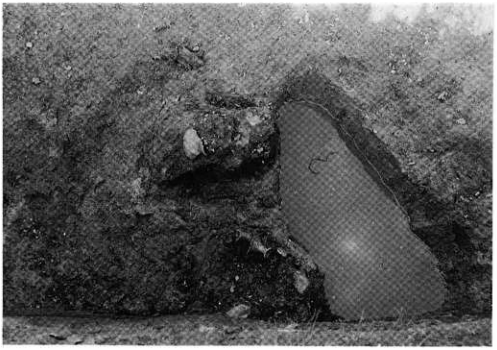
SK07．08
完堀後



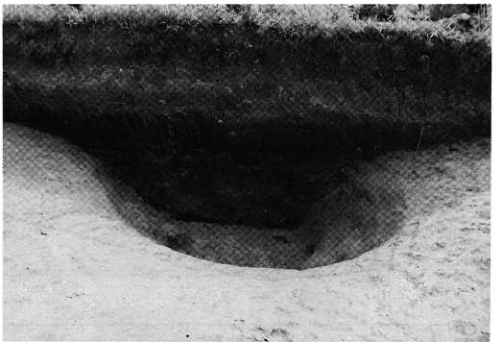
SK09
完堀後

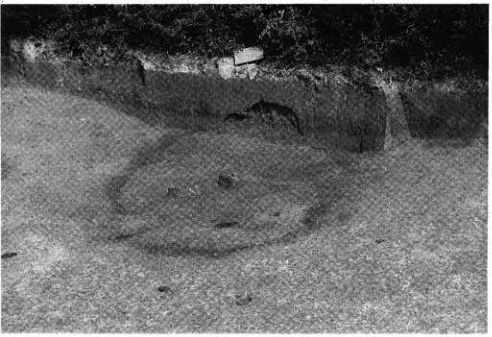
SK10
完堀後

SX01
遺物出土状況

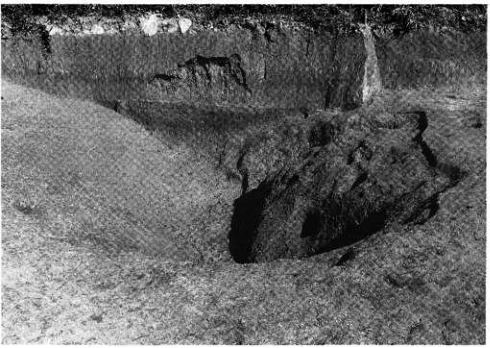


SX01
完堀後



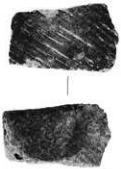


ＳＸ０２
検出状況



ＳＸ０２
完堀後

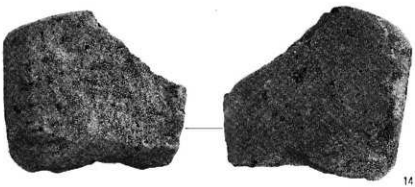
ＳＸ０３
完堀後



14－1

14－2

14－3



14－4

20－1

20－2

20－3

24－1

24－2

24－3

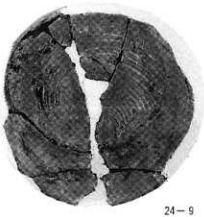
24－4

24－8

24－7

24－5

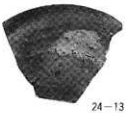
24－6



24－9

24－11

24－10



24－13

24－12

26－2

26－3

26－1

26－4

26－5

26－6

28－1

28－2

28－3

28－6

28－4

28－5

28－7

28－8

28－9

28－10

28－11

28－13

28－14

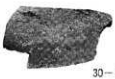
28－12

28－15

以上遺構出土遺物

30－1

30－2

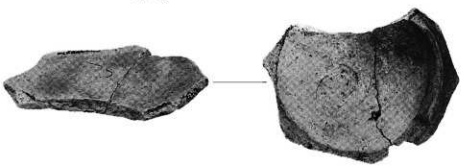


30－3

30－4

30－5

30－6



30－7

30－8

30－9

30－10

30－11

30－12

30－13

30－14

30－15

30－16

30－17

30－18

30－19

30－20

30－21

30－22

30－23

30－24

31－1

31－2

31－3

31－4

31－5

31－6

31－7

31－9

31－8

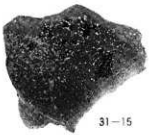
31－10

31－11

31－12

31－13

31－14



31－15

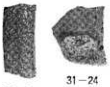
31－16

31－17

31－18

31－19

31－20　31－21　31－22



31－23　31－24

32－1

32－2

32－3

32－4

32－6

32－7

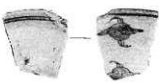
32－5

32－8

32－9 32－10 32－11

32－12 32－13 32－14

32－16



32－17

32－18

32－15

32－19

32－20

32－21

32－22

32－23

向遺跡発掘調査書

1994年3月

発　行　㈶松江市教育文化振興事業団

印　刷　有限会社 高浜印刷所

松江市北堀町8